

2019 年新春を迎えて ～私たちの進む道～

皆様 新年明けましておめでとうございます。皆様には、健やかに新春をお迎えになったことと存じます。本年もこれまでと同様、よろしくお祈りいたします。



はじめに、2011年の東日本大震災以降、豪雨、地震、台風、猛暑、豪雪などの自然の猛威による災害が、連続的に発災しました。

昨日（2019.1.8）も種子島近海で震度4の地震が発生しました。

私たちは、自然災害に対して、「たぶん自分は大丈夫だろう」とか「自分はなんとかなる」という安易な考え方をやめ、一人ひとりが、大規模な自然災害に対して誠実な備えをしておく必要があります。

その上で、困難な立場にある方々を支え、防災の構えを確かなものにしていくため、職場や地域で労働運動ならではの役割を果たし、たった一つの大切な命を守らなければ、と思います。

さて、連合は今年結成30年の節目を迎えます。

1989年当時の情勢は、世界的には、東欧の民主化、ベルリンの壁の崩壊、東西冷戦の終結となり、グローバル化が急激に展開をはじめました。

一方日本は、バブルの絶頂期（日経平均株価：38,915 円を記録）にあり、企業は円高に対応するために海外移転を開始し、合計特殊出生率が「1.57」と公表されました。政治的には、連合参議院が 11 名誕生しました。時代的には、「一億総中流から格差の拡大」に向かい始め、少子高齢化が深刻化し始めた時でした。

このような国内外における経済的・社会的・政治的状況の大きな変化は、労働運動に対しても、これまでにはない新たな課題を突き付けることとなりました。

連合は、この新たな課題解決を含め、さらなる労働組合の社会的価値を高めるため、新たな物の見方・考え方の「座標軸」を作り変え、課題を読み解き、展望を切り開くことをめざし、結成されました。

連合は結成以降、次の 4 点を基本に運動を推進してきました。

- ①「経済大国・生活小国」を脱却し、「豊かさを実感」するための政策・制度を実現する。
- ②イデオロギーから生活重視への質的転換を行う。
- ③労働組合運動として、政権交代可能な政治システムの確立に向けて、政治に対する影響力を高める。
- ④未組織労働者や弱い立場にある労働者に視点を当てた運動の展開をはじめ、労働運動の改革を行う。

この間の運動の成果と課題は、本部・地方連合会ともに年次の大会や委員会で報告を明らかにしていますので述べませんが、重要な時期には、2003 年の連合評価委員会の最終報告、2009 年の連合結成 20 周年 P T の最終報告、2010 年の「働くことを軸とする安心社会」というめざす社会像の提唱など、その時々運動の補強を行いながら、ど真ん中の道を正々堂々と 29 年間前進してきたと理解しています。

今、私たちを取り巻く状況はどうでしょうか。

世界を俯瞰して見わたせば、国連では 2030 年までの世界共通の達成目標である SDGs「持続可能な開発目標」が採択されました。17 の目標に対して、169 のターゲット、230 の指標が示され、集計・分析が行われています。

しかし、個別に見渡せば、アメリカにおけるトランプ政権の誕生、イギリスの EU 離脱以降、各国は「言論による国際協調」というよりも、「対立と圧力による自国利益優先」に進む国が顕在化しています。

日本もまた同様で、「言論の府」とは程遠い国会の現状や県民の民意でえられた人（政治家）が、「民意に応えられる政治をする」と口先で言いながら、他方で「自分に不都合な民意は尊重しない」という、不謹慎で不埒な状況をつくりだしています。

足下に目を移して、連合大分は、結成 30 年の節目を契機に、5 年先、10 年先を見据えながら、自分たちの原点を見つめ直していきたいと思っています。

日産労連、自動車総連の会長を歴任し、連合の事務局長をされた草野忠義さんが私たちに残した「担雪埋井（たんせつまいせい）」、

～雪を担って井戸をうずめる～という言葉があります。

「雪を担って井戸を埋める」、一見無駄な仕事、意味を成さない努力を黙々と続ける、という意味です。私たちは、ややもすると自分の名声や自分の手柄を求めがちになり、目先の良い結果だけを狙いがちになってしまいがちになります。

しかし、それはどうなんだろうか。

私たちが追求してきた労働組合の運動は、ある面このような「手柄を求めた努力ではなく、また、結果だけを狙った努力でもなく、一見無駄な、意味を成さない努力」にこそ最も価値がある努力とし、そんな努力ができる心を大切にしてきたのではないかと。と草野さんは、私たちに問われているのだらうと思います。

私たち連合大分に結集する組織労働者は、「組織強化の原点は職場にあり」を基本にして、職場で働くすべての人たちとの「人間的な交流」をはかることによって、庶民感覚を持った一人ひとりの組合員の常識や良識を磨いていき、多様性のある人材を育てていかなければなりません。

そして、私たちの運動は、この普通の国民・市民の目線を持っている労働者の生活の知恵や発想、常識や良識が、原動力になっていることを踏まえることが大切になります。

その上で、一人ひとりの組合員のエネルギーを発揮させていくためには、いろいろな「本や書籍を読むこと」によって先人の知恵と発想を学び・共有し、さらには、「人間的な交流」のもとで一人ひとりの組合員の声、声なき声に耳を傾けていき、職場の労働条件の改善、あるいは政策・制度の実現につなげていき、組合員や働く者たちが求める「よい結果」を出すことを追求していきたいと思います。

連合大分は、このような「人と人とのつながり」強めることを原則として、当面する2019春季生活闘争、集団的労使関係の拡大に向けた「1000万連合」の実現の取り組み、働き方改革の推進に向けた「Action36」の取り組み、統一地方選や参議院議員選挙等の政治闘争、人口構造の変化や押し寄せる技術革新の波といった様々な課題に積極果敢に、「猪突猛進」に取り組みを進め「働くことを軸とする安心社会」の実現に向けて、展望を切り拓いていく所存でございます。

とりわけ、本年7月に実施予定の参議院議員選挙について、弊害ばかりが目立つ一強政治を打破するためにも、働く者・生活者の立場に立つ政治勢力の拡大が重要となります。

比例代表においては、10人の連合組織内候補全員と自治労大分県本部が推薦する「吉田ただとも」候補の当選を勝ち取ることが求められます。

また、32ある1人区での勝利も大きなカギを握ります。大分選挙区における「安達きよし」候補の勝利を勝ち取らなければなりません。

連合大分は、この12人全員を国会に送るために、構成組織、地域協議会、国民民主党、立憲民主党、社民党、議員懇、退職者連合、部落解放同盟大分県連をはじめ、連携するすべての組織と、組織の総力を挙げて、取り組みをすすめて、必ず勝利しようではありませんか。

連合大分は、労働組合としての自信と誇りをもって、すべての取り組みを通して、基本的人権が尊重され、人と人のつながり、人と人の絆が大切にされ、貧困や差別、社会的排除を許さない社会を展望していきたいと思います。

ともに頑張りましょう！

